



近代スポーツの誕生と発展

帝京大学 観光経営学科

教授 石井 昭夫

1. レジャーとスポーツとツーリズム（はじめに）

レジャー（娯楽）とスポーツとツーリズムは近親の関係にある。スポーツはレジャーの一分野といえるし、ツーリズムは移動を伴うレジャーやスポーツと考えることができる。文明の誕生から今日まで、いつの時代でも、人は生活の糧を得るための行動とは異なる非日常活動として類似の活動を行っていたことであろう。しかし、近代社会でのレジャーやスポーツや楽しみの旅は、自由時間と経費をとまなう行動であるから、それらが広く行われるようになるには、経済が発展し国民の生活に余裕が生まれる産業革命の進展を待たなければならなかった。

本稿で考察しようとするのは、スポーツが王侯貴族など支配階級に属するごくわずかの¹人々だけが楽しむ活動の域を脱して中産階級レベルの人々も楽しめる余暇活動になるのはいつ頃で、どのように展開してきたのかということである。支配階級はいつの時代でも生活のための労働を免れ、自分たちの楽しみのために費やす時間と手段をもっていたから、娯楽にしろ、肉体の鍛錬にしろ、旅にしろ、ごく少数の人々に限定すれば、古代から行われていたことになり、それらのルーツを起源まで辿ることはほとんど意味がない。

その意味で、近代ツーリズムが鉄道の出現（1830 年）とともに始まったとされ、馬車時代の旅と区別されるように、近代スポーツもまた 19 世紀半ば以降に誕生したと考えることができる。肉体的な遊びや訓練など、今でいうスポーツに類似した行動は古くから行われていたとしても、近代以前は通常の遊びと分化しておらず、ルールも一定せず、あえて遊びの中の身体的競技の面を強調しても、スポーツというより、戦いのための訓練の域を出なかった。

スポーツという言葉は「遊び・気晴らし」を意味する中世フランス語のデスポール *desport* をイギリス人が転用して *disport* とし、それが縮まって *sport* となったとされている。著名な用例に、1618 年英王ジェームズ 1 世が、日曜日と祝日の礼拝後の「わが善良なる臣民の合法的娯楽」を妨げてはならないとした布告書「ブック・オブ・スポーツ」*Book of Sports* というのがある。日本語では「遊戯の書」と訳され、その内容は、見方によれば、国王による遊びの勧めの趣がある。近代以前の庶民の娯楽は、ほとんどが農業の季節的なリズムか、教会が定める暦に密接に関わるものであったが、庶民が楽しむ祭礼時の娯楽は時として過激にわたるために公共の秩序を乱す行動として、あるいは、遊びは勤勉の敵で怠惰に導くものとして、禁止されることが多かった。したがって、「遊戯の書」がいう合法的な娯

樂とは、過激に走らず、支配階級の容認する範囲の娯樂であって、それさえ禁じようとする安息日重視の清教徒勢力に対抗する王権の反発に過ぎず、いうまでもなく真の意味での遊びの勧めではなかった。ちなみに、この書に例示されている合法的娯樂とは、男女の踊り、男性のアーチェリーや跳躍などの日常的な遊戯のほか、祭礼時の娯樂であるメイ・ゲーム（春の訪れを祝う 5 月祭の娯樂）、聖霊降臨祭の酒宴、モリス・ダンス（男性の舞踊）、メイポール（5 月祭や夏祭りに会場に立てる木の柱）を立てること、といった慣習的行事があげられている（ロバート・マーカムソン著 川島昭夫他訳「英国社会の民衆娯樂」）。

民衆の娯樂は、王権と清教徒^{ピューリタン}の対立の中心課題のひとつであり、ジェームズ 1 世の子のチャールズ 1 世はこの「遊戯の書」を印刷して配布したが、宗教戦争の時代にあって、勤勉・節約・抑制・家族愛といった道德律を掲げる清教徒にとって「悪魔の書」とみなされて焚書にあうなど激しい対立の元になった。結局、清教徒革命（1642－1649）でチャールズ 1 世は処刑されてオリバー・クロムウェルの政権が誕生する。新政府はあらゆる娯樂を禁止し、一時的にせよ「愉快的イギリス」の伝統は一掃されてしまうのである。

王政復古後も、支配階級のための娯樂を除いて、庶民の娯樂は様々な制約を受けたが、中でも、庶民の遊びの代表であったフットボールは何度も禁止令が出されている。にもかかわらずフットボールが続いたのは、それだけ人気ある遊びだったからであろう。ただし、フットボールにしろ、クリケットにしろ、民衆が参加する肉体的な遊びは、18 世紀までは今日の意味でのスポーツとは大きく異なる行動であった。以下、肉体を使う娯樂が遊びと分化して近代スポーツへと変化する経緯と発展の道筋を辿ってみよう。

2. スポーツ前史としての古代オリンピック

近代スポーツに入る前に、オリンポスの神々の祭典として開かれた古代ギリシャのオリンピックについて簡単に振り返っておこう。スポーツの手近な定義をみると、「人間が考案した施設や技術を利用し、ルールに則って営まれる遊戯・競争・肉体鍛錬の要素を含む身体を使った行為。勝敗や記録達成を主な目的で行われるものはチャンピオン・スポーツ、楽しむことや体を動かすことを主な目的として行う場合はレクリエーション・スポーツと呼ばれることもある」（Wikipedia）となっている。これはスポーツの外形的な定義だが、国民の間に広まった近代以降のスポーツについては、スポーツの教育的効果とか、フェアプレイやチームプレイなど、いわゆるスポーツマンシップと称される精神面のプラスの効用を抜きには語れないであろう。

4 年に 1 度、戦争中であれば戦争を中断してまで開催された古代オリンピックは、スポーツという言葉こそ使われなかったが、スポーツの起源と呼ぶに足る条件を備えているといえよう。事実、後述するように、19 世紀末にオリンピックを復活させるに当たって、クーベルタンたち推進者が注目したのは、古代オリンピックが体現していたとするスポーツの持つ社会性や肉体の美しさ、肉体と精神の調和による人格形成といった特性であった。

奴隷制の上に成り立つギリシャの都市国家の時代、自由市民はスポーツもレジャーも観光目的の旅行も結構楽しんでた。その意味では、レジャーもスポーツもツーリズムも、ギリシャ時代に原初の形態として誕生していたとも言える。

とくにスポーツについては、何世紀にもわたって肉体を蔑視してきたヨーロッパ中世以来の宗教思想を経て、肉体の復権、ないし肉体と精神の一体性を重視する古代オリンピックで行われたスポーツ競技に理想像を求めたのは当然であつたろう。

ちなみに、古代オリンピックでは、短中長距離走、円盤投げ、やり投げ、ボクシング、レスリング、四頭立て戦車競走、古代五種競技など合計 26 種の競技が行われており、そのまま継続されていれば、スポーツの発展史は全く違ったものとなっていたはずである。古代オリンピックは B.C. (紀元前) 776 年に始まり、B.C.400 年頃を絶頂期として衰退を始めている。その後、ギリシャが古代ローマ帝国の支配下に入ると、オリンピック競技大会はローマで開かれるようになり (ギリシャのオリンピアでは少年の競技のみ実施)、皇帝ネロの干渉などもあって墮落していく。そして、372 年ローマ帝国がキリスト教を国教と定めたことによって、異教徒の祭典であるオリンピック競技会は 373 年の大会を最後に禁止されて消滅したのであった。

それ以降は、過度に精神性を重んじて肉体を卑しむキリスト教の教義のもとで、ヨーロッパ中世はスポーツ空白の時代となっていく。中世に肉体的競技の痕跡をとどめたのは、わずかに騎士たち戦士階級による戦闘のための鍛錬や闘技 (トーナメント) くらいであった。ただし、世に伝えられる華やかな騎士道の闘技は、中世最末期のごく短い時期の現象であつて、実際は中世を通じて闘技は実戦と異ならなかった。傷つき、死ぬ場合も多く、敗者の武器や馬などは奪い放題であつたという。そのような強い者勝ちの命を賭けた闘技が、ルールを定め、公正で公平な判定とフェアプレイによるスポーツ競技に変貌するには長い時間が必要だったのである。

3. 近代スポーツの誕生

ところで、現在世界的に行われている近代スポーツのほとんど全てが英国で誕生している (ウィンタースポーツを除く)。競馬、ゴルフ、アーチェリー、クリケット、サッカー、ラグビー、ホッケー、クローケー (ゲートボールの元になったスポーツ)、テニス、陸上競技、水泳、漕艇、ボクシング、サイクリング、登山、バドミントン、卓球などである。ほかに世界で広く行われるようになったスポーツといえば、ヨーロッパ大陸北部 (ドイツ、スウェーデンなど) 生まれの体操とアメリカで誕生した野球、それに日本の柔道くらいであらうか。

近代スポーツが成立するためには、単なる遊びから分化し、力と技を競うためのルールや場所や用具が決められ、支配階層だけの遊びから中産階級にまで広がることが必要で、その条件を満たして初めてスポーツ競技として認められる。さらにそこから大きく発展するためには、プレーヤーのほかに観客が登場し、観客の前で試合が行われることで人々の関心を集め、ファンを生み出していくという過程を辿る。

特定のスポーツ競技の起源を考える場合、どこかで誰かが行うようになり、同様の活動が他の地域に広まっていくとして、それらのルールや遊び方がある程度まで一定しないうちは、スポーツ競技として成立したとは言えないであろう。例えば、ボール (球・毬など) を蹴ったり、打ったり、転がしたりする遊びは世界中どこでも古くから行われており、ルールも遊び方もまちまちであるから、それらの痕跡を追いかけるのはあまり意味がない。

河北稔編『『非労働時間』の生活史』は、スポーツが社会的に成立したかどうかは、競技と競技者の全国的統括団体が成立した時点を目安とするとしている。これによると、概ね 18 世紀半ばの産業革命が始まる頃から 19 世紀の後半にかけて多くのスポーツが生まれている。もちろんそれぞれの競技の中には、それ以前に数世紀にわたって様々なバリエーションによって遊ばれてきたものもあることは言うまでもない。

同書によると、統括団体が誕生した最初期のスポーツとしては、1750 年、全英の競馬レースを統括するジョッキークラブ(Jockey Club)が結成された競馬、1754 年に統括団体としてセント・アンドリュース・ゴルフ・クラブ (St.Andrews Golf Club) ができたゴルフ、1781 年に弓術愛好協会 (Toxophilite Society) が設立されたアーチェリーなどがある。のちに英国の国民的スポーツとなるクリケットは、1787 年にメリルボーン・クリケットクラブ (Marylebone Cricket Club)が設立されている。これらはそれぞれの団体が設立された時をもってスポーツ競技として社会的に成立したと認められている。

しかし、時代はまだ工業化以前の農業中心の社会であって、余暇を享受するのは貴族およびジェントルマン階級（ジェントリー：貴族ではない地主富裕階層）だけであり、スポーツと呼ばれるほど高度の遊びができるのは彼らエリートだけであった。当然ながら、この時期のスポーツは有閑階級の遊びにとどまり、近代スポーツ誕生の前史と見るのが妥当であろう。

例外はクリケットである。上に列記した最初期に成立したとされるスポーツのうち、クリケットだけは民衆に起源をもち、1300 年頃にはプレイされていたという記述が残っている。早くから農民や僧侶、あるいは少年たちに親しまれてきた様子がうかがわれ、かのクロムウェルが 1620 年にプレイに参加したとの記録も見られるという。しかし、呼び名はクリケットでも、現代の競技形態に直接つながるスポーツとは必ずしもいえない。現代のクリケットに必須のウィケット（3 本の柱）が登場し、その攻防を中心とした競技の形が認められるのは 1700 年前後で、さらに、規則らしいものが記録されるのはずっと後のことである。

クリケットは英国で誕生し、現在 100 ヶ国以上で行われている人気スポーツのひとつで（不思議なことに日本には取り入れられなかった）、ラグビーと並んでフェアプレイ精神を尊重する紳士のスポーツといわれるが、例外的に民衆に起源をもつスポーツである。ジェントルマン階級が自分たちの階級の遊びとして取り入れ、パトロンとして競技大会を運営するようになって民衆から遊離し、上流階級のための「紳士のスポーツ」へと発展していったものである。

英国に鉄道の幹線網が出来上がった 1850 年代以降、多くのスポーツが急速に誕生・発展し、競技会は地域レベルから全国レベルへ、そして国際レベルへと発展する。言い換えれば、スポーツも長距離移動手段の発展と軌を一にしており、鉄道の発展、旅行の発展と大きな関わりがあるのは当然である。

4. なぜイングランドでのみスポーツが誕生したか

上述のとおり近代スポーツの殆ど全てが英国（とくにイングランド）生まれであるが、では「なぜとくに英国で」なのか。マクロに見ればいち早く産業革命を達成して世界最初

の工業国となり、国民が他より早くスポーツを楽しむレベルにまで経済が発展したからということになる。それに、世界で一番早く鉄道のネットワークを成立させた結果による旅行の容易性が、競技会などの開催を容易にしたという事情もある。しかし、それだけでは他のヨーロッパ諸国にスポーツが誕生しなかった理由は説明できない。

ミクロにみれば、むしろスポーツという遊びや競技は、人々の生活に密着した独自の社会的性格を持っており、その誕生の理由も産業革命発展期の英国社会の在り様と密接に関わっているというべきである。とくに当時の英国の支配階級である貴族・ジェントルマン階級が他のヨーロッパ諸国と異なっていたという事情が強く関係しているように思われる。

フランス革命前のフランス貴族や僧侶階級が、絶対王政のもとで不在地主として宮廷で過ごしていたのと違い、イギリスでは、英仏百年戦争（1338～1453）に続くバラ戦争（1455～1485）によって、中世以来の旧貴族がほとんど絶滅したために、イギリス支配層の貴族とジェントルマン階級はそれ以降のものであって、ほとんど特権を持たず、税金も負担させられていた。彼らは上層ブルジョアとさして異なるところがなく、商業にも従事し、ブルジョアと協力して事業を営み、好んで自分の領地に居住してその経営に努力していた。

このようなイギリスの特異な支配階級の下にあって、産業革命以前は、レジャー活動一般、とくに道具や場所を必要とするスポーツは、余暇を占有した貴族・ジェントルマン階級が自ら楽しむ活動として行われていた。中にはクリケットのように民衆起源のものもあったが、ルールの決定や競技の場所の確保、競技会の運営などはジェントルマン階級に依存したため、ほぼすべてのスポーツがジェントルマン階級をパトロン（支援者）として発展したのであった。

観光史上、近代ツーリズムは鉄道の誕生とともに始まったとされるが、それ以前に観光行動がなかったわけではなく、馬車の時代にも貴族・ジェントルマン階級は、内陸部の温泉場などに避暑避寒に出かけ、あるいは楽しみのための旅行を行っていた。それと同じ意味で、スポーツも、大量移動手段がなく、階級的にも地域的にも狭い範囲でしか行われなかった間は、ルールもあいまいで原初形態にとどまっていた。この時代を前史とし、スポーツを楽しむ層が広がって、各種の対抗試合などが行われるようになる鉄道以降を、近代スポーツの誕生・発展の時代として検討してみよう。

ちなみに、鉄道ネットワーク成立以後のスポーツ競技団体の成立をみると、サッカーが1863年にフットボール協会（FA）を設立、ラグビーは1881年にラグビー・フットボール・ユニオン(RFU)を設立、1881年にローンテニス協会、1887年にホッケー協会が設立されている。

特定のスポーツ競技を広く楽しむようになるには、きちんとしたルールや道具、競技の場所に関する規定などが整えられる必要があったのである。以下、民衆娯楽の代表であるフットボールを例として、スポーツの誕生と発展の経緯をみてみよう。

5. フットボールの誕生と発展

スポーツが殆ど全てジェントルマン階級をパトロンとして発展してきた中で、フットボールだけは、19世紀の初めに至るまで、農業を主産業とする前近代的な共同体の生活リズムの中で生まれ育ってきた〈庶民による庶民のためのレジャー活動〉であった。概して

残酷で粗暴な性格をもっていたのも、ひとつにはそれが、特定の宗教祭日に限って無礼講が許されるという前近代的共同社会の非日常的祝祭性に支えられてきたからと考えられている。このような非日常的祝祭日の、過激なまでに勇猛な庶民の活動はどここの国でも行われ、日本でもけんか祭りなど、時には命を落とすような荒々しいエネルギーの発散が見られるとおりである。それだけにその歴史は、余暇を独占してきたジェントルマン階級を中心に発展してきたスポーツとは大きく違う展開を見せる。

民衆スポーツとしてのフットボールは、産業革命後の都市化と近代化の進展の中で衰退するのだが、その辺りを荒井政治著「レジャーの社会経済史」によって見ると、「19 世紀に入り、工業化・都市化が進むにつれて、土地の囲い込み（エンクロージャー）運動が急速に進展し、都市と農村を問わず、かつては地域住民が自由に通行できた小路は塞がれ、出入りできた空間には生垣や柵がめぐらされた。囲い込みによる共同地や荒蕪地^{こうぶち}の私有化は、大衆にとっては、昔からの遊び場を奪われ、レクリエーションの機会が減ることを意味した」のであった。

広いオープンスペースを必要とし、ジェントルマン階級の保護を受けない民衆スポーツのフットボールは、囲い込みで遊び場を失って衰退を始め、農村から都市への住民の移動と工場労働者化による自由時間の制約、そして、その粗暴な行動ゆえに官憲の取締りが強化されて、19 世紀の中ごろにいったん断絶してしまう。かくして、古い形の民衆のフットボールは消滅し、その後パブリックスクールの学生スポーツとして生まれ変わり、新しい発展を遂げるのだが、そこへ至る道程を少し詳しく見てみよう。

1) フットボールという言葉

フットボールという言葉が文献で使用された歴史を細かく追及している F. P. マグーン Jr. 著「フットボールの社会史」によると、フットボールのことであろうと推測される記述は 1100 年代から散見されるが、実際にフットボールという言葉が文献上で確認できるのは、1314 年、ロンドン市長ニコラス・ファーンドンが治安維持のために発した布告に初めて登場している。布告の内容は「大規模フットボールによって生ずる騒動が原因で、市中に騒乱や不祥事が生じかねないので、以後市中ではこの種の競技を禁止し、違反するものは投獄する」というもので、その後 1846 年までにあちこちで 42 種もの同様の禁止令が出されているという。

いずれにしても、当時のフットボールは荒っぽい遊びで、定まったルールはなく、死亡事故が頻発する野蛮なものであった。1500 年以降は、上流階級が行うべきスポーツではないとして禁止され、オックスフォード大学やケンブリッジ大学でも公式に禁じられた。何度も何度も禁止令が出されるということは、裏を返せば、庶民のエネルギーを発散させる数少ない機会として、禁止令を無視して行うほど庶民が好んでいたことの証しである。

2) 民衆スポーツとしてのフットボール

競技の場所は、農村なら入会地^{いりあいち}・畑地・野原など、都市なら郊外・空き地・広場などで行われた。プレーヤーと観客の区別が希薄で、人数に決まりはなく、30～40 人でやったり、

教区対抗では住民のほとんどが参加し、何百人何千人になることもあった。

ゴールは東西の門とか、適当な場所に設定され、ルールも慣行上の不文律だけで、騎馬でボールを運んでもよい、相手を蹴っても殴ってもよい、馬上から棒で操ってもよいなどというものであった。つまりは、空間的にも時間的にも無限定で、粗暴な行動も公認のようなものだから、試合の日は町中が騒乱状態になることが多く、集団の喧嘩のようなものであった。

ちなみに、ボールは18世紀までは牛・豚などの家畜の膀胱に空気を入れて膨らませたものを皮で覆ったものを使用していたという。

3) パブリックスクールとフットボールの再生

英国が殆どのスポーツを生んできたことは、既述のとおり英国の支配階級の特殊なあり方に起因しているが、これに併せて、パブリックスクールが大きく貢献している。英国のパブリックスクールは、当初は授業料に依存しないで済む基本財産をもとに運営され、貧しい家庭の子弟に開かれた中等学校であったために「パブリック」と冠されたが、18世紀後半以降は、大半の生徒が授業料や寮費を自己負担する上流階級の子弟の寄宿制の学校になっていた。11～18歳までの幅広い年齢層の男子生徒が寄宿生活をともにするという他国に例のない教育機関で、喧嘩が奨励されたり、上級生による下級生いじめが常態化していたり、思春期特有の様々な行き過ぎもあった。

パブリックスクールにおいても、18世紀の後半には荒々しい民衆のフットボールが遊技として採り入れられていた。エリート養成学校と民衆の粗雑なスポーツの取り合わせは奇妙であり、「貧乏人のスポーツはパブリックスクールには相応しくない」という意見も当然あったが、そうした蔑視にも拘らず生徒たちが好んだことは、それだけエネルギーを発散できる面白い遊びだったからであろう。フットボールがパブリックスクール共通の上級生による下級生いじめの道具になっていたことは、多くの書物が取り上げていてよく知られているが、山本浩著「フットボールの文化史」もラグビー・ルール誕生までの経過の中でその様子を詳しく描いている。

19世紀前半のパブリックスクールは、教職員が自分たち学生より身分が低い出身であることも理由のひとつで、学生が教職員の言うことを聞かず、寄宿生活という閉鎖社会の中でその荒れ方は放置できないレベルに至っていた。パブリックスクールの改革を断行する期待を担って登場したのが、ラグビー校の校長として赴任したトマス・アーノルドであった。それまで他校に比べて特徴がなかったラグビー校は、アーノルド校長の指導の下で大きく変化する。アーノルドは、カリキュラムを刷新して生徒の知力を伸ばしただけでなく人格教育を展開した。そして、それらの改革のためにスポーツの果たす役割を重視し、いじめの温床になっていたフットボールを、逆に改革の手段として活用したのであった。19世紀後半になると、新しいパブリックスクールが各地に建設されるようになるが、新設のパブリックスクールの多くは、アーノルド校長に同調してスポーツを賛美する風潮が高まっていった。

1857年、19世紀前半のラグビー校の学校生活を描いた「トム・ブラウンの学校生活」が出版された。この小説はアーノルド校長（1828～1842在籍）のパブリックスクール改革期

に学んだトマス・ヒューズ作品であり、スポーツが人格形成に重要な意味をもつことを初めて世間にアピールした作品として知られている。ちなみにアーノルド校長とこの「トム・ブラウンの学校生活」は、のちにフランスのピエール・ド・クーベルタンに大きな影響を与え、スポーツマンシップとフェアプレイを重視し、心身の教育に役立つスポーツの振興という思いとともに、近代オリンピック再興という発想に結びついていくのである。

4) ルール確立への試み

パブリックスクールでの粗暴なフットボールを、グラウンド内の競技スポーツにするためのルールづくりのきっかけとなったのは、1823 年ラグビー校の生徒であったウィリアム・ウェブ・エリス少年が、ルールを無視してボールを抱えて走ったことが発端ということになっている。この逸話は、ずっと後の 1878 年に、マシュー・ブロックサムというほぼ同時代にラグビー校に学んでいた OB が回顧録に書いた記録に基づいたもので、どこまで本当の話かよくわからないが、いずれにしろ、フットボールの歴史を振り返る文献には必ず登場する。現在のラグビー校の構内にはエリス少年の記念碑があり、記念碑には「1823 年、エリス少年が初めてボールを腕に抱えて走り、これがラグビー誕生につながった」と刻まれている。「フットボールの文化史」によれば、1888 年にエリス少年のこの逸話が本当であるかどうかを確認するための調査委員会が設けられ、2 年後に報告書が提出された。同報告書では、50 年以上前に行われた 1 つのゲームの真相まではわからないが、あり得ることとの結論を出したうえで、腕にボールを抱えて走るやり方は 1820 年代に始まり、1830 年から 1840 年にかけてゆっくり競技の一部として受け入れられ、1841～42 年に合法化されたと記されている。エリス少年の記念碑は、この報告書を踏まえて建てられたものである。

1845 年に、ラグビー校の上級生の集会で、非常にラフなものながら初めてフットボールのルールを成文化し（46 年に一部改定）、これをもってラグビータイプのフットボールの始まりとされている。

他方、アーノルドが校長を勤めるラグビー校と対抗意識の強かったイートン校では、2 年後の 1847 年、ボールを手にとって持たないことをはじめ、ラグビー校のルールとは大きく異なるルールを定める。その結果パブリックスクールは 2 派に分かれて対立し、これによってフットボールは、ラグビー型とサッカー型という全く違う競技に分かれ始めることになるのである。

主要参考文献

1. 「英国社会の民衆娯楽」ロバート・W・マーカムソン（川島昭夫他訳）、平凡社、1993
2. 『『非労働時間』の生活史：英国風ライフ・スタイルの誕生』川北稔編、リブレポート、1990
3. 「レジャーの社会経済史」荒井政治、東洋経済新報社、1989
4. 「フットボールの社会史」F. P. マグーン Jr.（忍足欣四郎訳）、岩波新書、1985
5. 「フットボールの文化史」山本浩、ちくま新書、1998

（続く）